

「よるべない100人のそばに居る。」 ：救護施設での出会いと人間関係

日時：2024年12月7日（土）13:00～14:30

場所：南山大学Q棟1階 Q104教室

講師：御代田 太一 氏

司会（池田）：

改めまして皆さま、本日はご多用の中、また寒い中、南山大学人間関係研究センター公開講演会にご出席くださりましてありがとうございます。本日の司会を務めさせていただきます、センター研究員の池田と申します。よろしくお願いいたします。

本日の講演会では、社会福祉法人グローが運営している救護施設ひのたに園で生活支援員として勤務していらっしゃいました御代田太一先生をお招きしまして、『「よるべない100人のそばに居る。」—救護施設での出会いと人間関係—』という演題で、現代社会における孤独・孤立、そして回復の過程などについて皆さまと一緒に考えていく、そういった場にしたいと思っております。本研究センターでは、人間の尊厳のために、豊かな人間関係をつくり上げていくために、ということで、さまざまな研究活動とともに、こういった、年に1～2回程度の公開講演会、また、社会人の方向けのさまざまな公開講座を開いております。そうしたご案内につきましては受付のほうに本研究センターの研究紀要、プログラムの案内等がございますので、お帰りの際にご覧いただければと思います。

では、本日の講師の御代田太一さんを改めてご紹介させていただきます。御代田さんは1994年、神奈川県生まれです。先ほどお話を伺っていましたら横浜市ということで、私は隣の川崎市出身で、住んでいた地名のことで少し話題が盛り上がりました。高校を卒業された後、東京大学教養学部をご卒業され、その後、ホームレスや刑務所出所者を受け入れる最後のセーフティネットという、書籍のほうにもあります救護施設にて生活支援員としてお仕事をされていらっしゃいました。そちらで支援員として働いていらっしゃる中で、聞き書きを通して、そういった施設に来るさまざまな「よるべない人たち」のそれまでの生き立ちであるとか生活について聞かれたことをまとめられ『よるべない

100人のそばに居る。〈救護施設ひのたに園〉とほく』という書籍をお書きになりました。本日、後ろのほうで書籍の販売も行っておりますので、よろしければ後ほど手に取っていただければと思います。

それでは御代田先生、よろしくお願いいたします。

御代田：

御代田太一と申します。今日はお越しいただいてありがとうございます。よろしくお願ひします。治りかけの風邪をこじらせていまして、あめ玉をなめながらで恐縮なのですけれども、お話をさせていただきます。

今回「よるべない100人のそばに居る。」というのは後ろでも販売させてもらっている本のタイトルなのですけれども、副題として「救護施設での出会いと人間関係」というテーマをいただきましたので、ちょっとそんなところにフォーカスしながらお話しできればと思っています。

自己紹介はご紹介していただいたとおりなのですが、横浜で生まれまして、ちょうど再来週30歳になります。高校を卒業した時点では、こういう福祉とか障害のある人のことには全く知識も関心もなかったような人間だったのですが、大学のときにある出会いがありまして、こういう分野に興味を持って、今、ここでお話をさせていただいているというような経緯になります。5年半滋賀県の救護施設で仕事をしまして、今は東京に戻ってきてサラリーマン生活をしているのですけれども、ゆくゆくは福祉のほうで仕事をしたいと思っています。

今日のタイトルにもあるように、救護施設の話をも60分ほどさせていただくつもりなのですけれども、まず皆さんにお伺いしたいのですが、今日この講演のチラシを見る前の時点で、救護施設をご存じだったという方はどのぐらいいらっしゃるでしょうか。

1人いる。

ほかにいないですか。

分かりました。そうですね。なかなかマイナーな施設かなと思います。

救護施設はどんな施設かという、法律上はこうなっています。生活保護法第38条第2項です。「救護施設は、身体上又は精神上著しい障害があるため日常生活を営むことが困難な要保護者を入所させて、生活扶助を行うことを目的とする施設とする」ということが書いてあります。

これを読んで、皆さんはどうですか。何か施設に対してイメージはわきますか。なかなかわからないですね、これはいったい何だと。「身体上又は精神上著しい障害があるために日常生活を営むことが困難な要保護者」と、何かすごくそんな人、とんでもない人が入る施設なんだなみたいに、法律上の文言だけ読むと思ってしまいます。福祉の勉強とかを一定されている方も、お仕事をされている方も含めて、今日はもしかしたら結構いらっしゃるかなと思うのですが、救護施設という言葉自体はどこかで見たことがあるとか、教科書に何となく書いてあったなという方はいらっしゃるかもしれませんが、この文言だけを読

まされて「これが救護施設です。はい、次」みたいな形で、いったい何のことやら分からないまま今にきてしまったみたいな人が、福祉の仕事をしている人も多いのではないかなと思います。

実態を見てみると、どんな施設かというと、生活保護法に基づいて運営されている保護施設の1つです。保護施設にはほかにも婦人保護施設¹とか更生保護施設とかいろいろありますが、そのうちの1つの施設です。数としては全国に約180カ所あります。これを多いと見るか少ないと見るかは人それぞれですが、介護施設は例えば特別養護老人ホームは全国に何万カ所とありますし、障害者施設も何千カ所とありますが、そういう施設と比べるとかなり少ない施設数です。180カ所あれば都道府県に大体4～5カ所ですかね。来る途中に調べてきたのですが、名古屋市にも2カ所あるみたいです。東京にも5カ所ぐらいですが、23区にはないので結構みんな知らなかったりするという、そんな施設です。

どんな方が利用できるのか。さっき難しい文言が並んでいましたが、基本的な条件は生活保護を受給していること、この1点になります。ですから、18歳以上なら生活保護を受給できるので利用可能ということです。基本的に生活保護で皆さんがイメージするのは、生活保護費を1カ月に1回か2カ月に1回もらいに行き、現金をもらって、それで家賃とか食費とか日用品に払って地域で暮らしていくみたいなイメージだと思うのですが、そういうこともなかなか難しい状態にある人たちとか緊急で保護が必要な人たちが生活保護法の中でやって来るような施設になります。どんな人がやって来るかというと、基本的には住まいがない、お仕事がない、身寄りがないという、無い無い尽くしの方がやって来るというところで、こういう方を即日受け止められる、こういう方が即日入所できるような唯一の公的な福祉施設という位置付けになっています。法律上はすごくざっくりとした位置付けになっていることもあって、介護保険とか障害者福祉サービスとかいろいろなサービスがありますよね。介護保険もデイサービスがあったり施設があったり、障害者福祉サービスも働くことを支える場所があったり子どもの障害のある方を支える場所があったりといういろいろ細分化されていますが、そういった縦割りになったいろいろな仕組みでは支え切れないような、仕組みの中でこぼれ落ちてしまうような人を受け止める役割を担ってきたというところで、最後のセーフティネットといわれたりもするような施設です。いろいろなところで話していると、日本有数のマイナーな福祉施設なのではないかなと思いますので、今日ご存じの方がほとんどいなかったというのも納得できるかなというような施設です。

こんなマイナーな救護施設という存在が最近、最近といっても少し前なので

¹ 女性自立支援施設

すが、実はテレビデビューすることがありました。2019年ですから5年前、京都市で救護施設を新しくつくろうとし、それに対して住民がいわゆる反対運動、行政に説明を求めるような運動を起こしたというようなことがニュースになりました。ちょっと画像を見てもらうと、右上の子連れの女性は「誰も納得していないのに無理やり税金を投入して」という発言が紹介されていたり、左下の「住民は反発」というところとか、右下は「京都市の説明ではホームレスや刑務所を出所した人が入所する可能性も」というような、右下のところは昼間のワイドショーなので結構いろいろな人を見る番組ですけれども、最近唯一取り上げられたのがこういう形で取り上げられたニュースという形になります。これはいろいろ調べてみると、行政側の説明がすごく足りていなかったり、近くに保育園とか小学校があったりして、トラブルになりそうな種はたくさんあるので、準備不足だったというのもあるのですけれども、どうしても地域の一般の人からするとこういう目で見られるような施設、というのが現実かなと思います。

右下のように「ホームレスとか刑務所出所者が入所する可能性も」と。「本当にそんな人が入所するんですか」「本当にそんな人が入所するんです」という感じで、救護施設にやってくる人は具体的には大体こんな人がやってきます。ホームレス生活を長くしていた人もいますし、1日2日ホームレス状態になって緊急で保護が必要な人もやってきたり、刑務所を出所したが行くあてのない人、派遣切りになって住まいと収入を失った人、病院、主に精神科病院を退院した人、あとは依存症。依存症の種類はさまざまで、お酒だったりドラッグだったりギャンブルだったりですが、生活が破綻した人、ドメスティック・バイオレンスから逃げてきた人、長期の引きこもり状態にあった人、といったような形で、さまざまな状態で生活が大きくつまづいてしまった人がやってくる施設です。これはもう完全に事実で、おそらくどの救護施設へ行ってもこういう人たちがいると思います。でも、確かにこういう施設が近所に建つと聞いたらびっくりしますよね。どんな人が生活するのか、まず建てる前にちょっと話を聞かせてくれと、悪いことは言わないから建てるんだったらもうちょっと小学校から離れたところにしろという気持ちになるのは自然なことかもしれないし、お子さんがいたらそういう不安はなおさら強くなるんだろうなと思います。

こんな施設に、僕は大学を卒業してすぐ就職して働くようになったので、その働いている中で出会った人の話とか考えたことをこれから共有できればなと思っているのですが、その前に、なぜそもそもおまえはこんなところで働くことを決めたのかというところを話さないと、たぶんあまりモヤモヤが取れないままお話をすることになると思うので、最初にそこだけ簡単にご説明できればと思っています。どうして救護施設かというところです。

先ほどもちょっと申し上げたとおり、私は高校を卒業するまでは、本当にただの元気な高校生という感じで、順風満帆な高校生でした。中・高は運動部に

入って、文化祭もリーダーをやったりして、何とかぎりぎりの成績で東大に入ったという中で、東大でももっと頑張るぞという感じで、国際交流に参加したり、いろいろ積極的に課外活動をしていました。このように、自分の興味が赴くままに高いエネルギーを持っていろいろ頑張れば、その先にいろいろな企業とか官公庁とか、そういう先輩たちが行っているようなところに行くことになるんだろうと、何となく思いながら過ごしていたような1年生でした。ここまでではありきたりな東大生、と言ってはちょっと語弊があるかもしれませんが、よくいるような東大生の1人だったかなと思います。

しかし、2年生のときに、人生を初めて考えるようなタイミングがやってきて、生きている意味って何だろうと考え込んでしまった時期が突然やってきたわけです。個人的には、小学校とか中学校とか高校でやってくるような思春期みたいなものがちょっと遅れて、僕の場合は大学のときにやってきたのかなというふうに振り返っているのですが、そんな時期がやってきてしまって、今までみたいにむやみに目の前のことを頑張って、期待される役割を頑張っていけばその先に明るい未来が見えるみたいなことが急にちょっと信じられなくなってしまって、一歩立ち止まって、自分って何で生きてるんだろう、どうやって生きていくんだろう、何が大事なんだろうみたいなことを「うーん」と考えるような時期が来てしまったわけです。

その頃に受講したのが、この右側の写真にも写っているように「障害者のリアルに迫る」ゼミというゼミで、今も東大で活動をしているゼミですが、障害の当事者とかさまざまなマイノリティの当事者ご本人をゲストに招いた授業で、ALSの当事者の方とか、盲聾という目が見えなくて耳も聞こえない方とか、精神障害を患っている方とか、医療的ケア児という重度の障害がある子を育てているお母さんとお子さんとか、そういういろいろな障害とかマイノリティといわれているようなご本人を呼ぶ授業だったわけです。通り一遍のバリアフリー論とかどういう支援が必要かという話ではなくて、私たちはどう生きてきたかとか日常そもそもどういうふうに住んでいるのかとか、そういうことを話してくれる授業だったので個人的にはとても面白くて、こういう世界があるんだと、こういう人たちが世の中に生きていたんだということを初めて知ったのです。僕自身、中高一貫校の男子校で中学受験をして入った学校だったので、もちろん障害のある同級生、分かりやすい障害のある同級生なんていないですね。基本的にみんなある程度均質性、同質性の高い集団の中で、3人に1人は東大へ入るみたいな学校だったので、そういう環境で生きていた自分にとっては、世の中ってこういう場所だったんだみたいなことを初めて知るような時間でした。小学校以来初めて出会うことになった障害のある人の話を聞く中で、この人たちが生きている人生のほうが自分の人生より生き生きとしているなとか、本当にできないことがたくさんあって人のサポートを必要としているところもたくさんあるのですけれども、もっと人生って自

由だし可能性に満ちているなみたいなことを、こういう悩みを持っていた時期だったということもあって、すごくそういうことを思ったわけです。

このゼミにどっぷりはまってしましまして、このゼミを通じて障害とか福祉という世界にどっぷりはまってしまって受講を続けるのですが、毎回授業の後に飲み会がありまして、近所の渋谷の飲み屋に繰り出して、講師も一緒にお酒を飲むということを毎回続けていました。この左側の笑っている、ちょっとおでこの薄いおじさんは、全盲聾の東大教授の福島智さんという方です。もしかしたらご存じの方もいるかもしれませんが、目が全く見えなくて耳が全く聞こえない、中途の方で高校生のときに全く見えなくて全く聞こえなくなったという方なのですけれども、全くインプットがない状態で、話せはするのですがインプットは「指点字」といって、点字の要領で五十音を指に打っていくわけです。通訳者の方がピアノみたいに指に重ねて周りの人の言葉とか雰囲気伝えていく。そういう全くインプットのない、見えなくて聞こえないという真っ暗闇の中に生きている人です。話を聞いているときはどうやって生きているんですか、そんなん生きていて楽しいですかと正直思ってしまうような人と飲み会に一緒に行くと、げらげら笑って酒を飲んでいるわけです。コミュニケーションも指点字で「御代田君のビールが減ってます」と通訳者の方がこっそり教えて、「御代田君、もっとビールを飲みなさい」と言ってきて、「福島先生、見えてないでしょう」みたいなツッコミをしたり、そんな形で一緒に楽しく宴席をとものにできて、自分と全然違う体の状態の人、人生を送ってきた人と、こんなに楽しい時間をともにできるんだみたいな新鮮さもあって、これがまた各回いろいろな障害の人が来ますから、各回それぞれ発見があって、夢中になって活動をしていたわけです。

こういうテーマに出会ってしまっていて、いっそ大学時代にきちんとこういうことを突き詰めて考えてみようと思って、大学を1年休学したのです。福祉の現場へ行ってみようと思って1年間休学して、いろいろな現場を回りました。訪問介護のバイトをしたり、精神科病院も2週間ぐらいインターンで行ったり、北海道のべてるの家という有名な、精神障害の方が地域で生きているところとか、いろいろ行きました。実際、教室の中では見られないような、分からなかったような現場のリアリティにも触れて、自分自身福祉の現場で働こうなんていうことはゼミを受講しているときには思っていなかったのですが、ちょっとずつ、働いて実際に責任のある立場に身を置いて初めて見える、傍観者のままではいつまでもたどり着けないすごく面白いものがあるんじゃないかという気がしてきて、もう勢いで福祉の現場で働こう、卒業後の俺の進路は福祉だ、と1人で決めて、社会福祉法人への就職を決意しました、というのが大まかな経緯になります。

ただ、よくある質問として、周りは反対しなかったのかというところですが、反対だったり疑問が当然いろいろな方から聞かれて、大学の友人なんかは「福

社の現場に行くわ」と言うのと、「介護士になるの？」みたいなことを言われました。高齢者介護というイメージが強いのかもしれません。「介護士資格を取るの？」みたいなことを言われたり、一応企業就活も何となくやっていたのですが、企業の内定先の人事の方からも、土日でボランティアで関わればいいんじゃないのみたいな、「うちへ来てちゃんと給料をもらって仕事をしていろいろ成長したほうが、後々福祉へ戻ったときに役に立つんじゃない？」みたいなことをいろいろ言われたりしました。母に至っては「福祉に興味があるのは分かるけど、せめて厚労省にしてくれ」と、ここは笑っていただきたいところなのですが、親の気持ちってこういう感じなんだなという感じです。せめて現場ではなく、意思決定をする上流のところに行ってほしいという思いがあるんでしょうね。そういう声がありましたが、反対は振り切ってというかもう決めていたので、ごめんよと言って滋賀県の施設へ行きました。

数ある福祉施設の中で滋賀県の救護施設という場所を選んだのには理由がありまして、私もいろいろ見学したのです。障害の福祉施設も見ましたし、児童の施設も見ましたし、介護の施設も見て、結構いろいろ福祉といわれるようなところを全般的に、1年暇だったので練り歩いたのですが、救護施設が一番面白かったのです。なぜ一番面白かったのかというと、福祉のお仕事をされている方だったらよく分かると思うのですが、福祉というのはそもそも高齢者とか障害者とか児童とか生活困窮者とかと、大きくごっこり分野が分かれています。その中でも、高齢者だったら特に介護度の高い人が入る施設、介護度の軽い人が入る施設、介護度が軽いから自宅で暮らす人が受けるサービスとか、サービスにもいろいろあります。障害も、障害の程度とか種類とか年齢とか目標とかによってサービスがいろいろ縦割りに区分されて、それ自体の仕組みはとても合理的だなと思いますし、専門性を蓄積させていいサービスを提供するということは理にかなっているっぽい。いろいろ知りたい、いろいろ出会いたいという気持ちだった僕にとっては、1つの施設で1つのカテゴライズされた人たちとしか出会えないというのはちょっと退屈だなと思っていたところがあって、それを壊してくれたのが救護施設だったのです。唯一ごちゃ混ぜな、先ほどちょっとご紹介したように、18歳以上は誰でも入れるし、昨日路上で寝ていた人もいればDVから逃げてきた人もいるみたいな、いろいろな背景の人がいるというところで、救護施設で初めて福祉サービスと出会うという人も多いということを聞いて、福祉サービスというものを知らない人に支援者として初めて出会うというその緊張感みたいなところも味わえるんじゃないかなみたいなことの期待感を持って救護施設へ行きました。

いざ救護施設ということで、私が働いていたのはひのたに園という救護施設です。名前のとおり、滋賀県の日野町というところにあります。場所としてはここです。滋賀県の南のほうで、人口2万人ぐらいの町です。本当に田んぼだらけで、ずっと大学時代を東京で過ごした僕にとっては、田んぼってこんなに

たくさんあるんだという感じだったのですが、そんな場所へ就職を決めました。

結構古い施設です。1970年に開設されて、今も変わらないのですが僕が就職した2018年当時は定員100人だったので、常に100人の方が暮らしていました。救護施設は出入りがある「通過型」ともいわれる施設なので、1年間に約70人の入退所があるということです。ですから、年間日数で割ると大体1週間に1人か2人、新しく入ってくる人がいて地域へと出て行く人がいるという、結構慌ただしい施設です。その100人の年齢構成で言うと、本当にバラバラですけれども、大体平均50歳から60歳ぐらいです。中には90代の人もいれば、就職した時点の僕より若い人もいました。男性のほうが比較的多くて、7対3ぐらいでした。入所期間としては定めがないので、後でもうちょっと詳しくお話ししますが、数日間しかいない人もいれば数十年暮らす方もいるというような施設でした。

これは施設の入り口です。1970年代に建てられた大規模施設で、ほかのいろいろな障害者施設なども同様だと思いますが、ちょっと人里離れた、坂を100メートルぐらい上っていった先の、山を切り崩したところにある施設なので、看板は「救護施設 ひのたに園」とドカンとあるものの、この坂の上にはいったいどんな人が暮らしているんだろうとか、救護施設と書いてあるけどいったいそれはどういう施設なのか、というような感じで見られているような施設でした。

いざここに就職して社会人デビューを飾ったわけですが、期待がものすごく、アパートを借りて一人暮らしをしてという感じだったのですが、やってきたのはドタバタの日々でした。初日に内定式を終えて、着慣れないスーツを脱いで動きやすい服に着替えて現場に行ったとき、最初に目にしたのは事務所の机に置かれたお菓子の山でした。大きいビニール袋にかっぱえびせんとかあめ玉とかおまんじゅうとかがいっぱい入った袋があって、「これ、御代田君、1つぐらい持って行く？」と言われて、「あっ、いいんですか。これ何ですか、誰かの差し入れですか」と聞いたら、「いやいや、実はこれはうちの利用者が昨日コンビニからとってきちゃってさ、うちが買い取ったのよ。だから、職員で分けようと思って」というのが最初でした。万引きってこんなにたくさん起こっているんだ、日常の世間話みたいな感じで万引きの話が出てくるんだという感じで。ちょうど僕が初日出会った、お菓子を盗んできた人がなかなかの常習犯というか何度も施設の外に出てお金を払わずにお店から物をとってきってしまうという癖のある人で、僕が就職してから大体1週間に1回ぐらい、基本的にはその人は外出禁止ということになっているのですが、職員の目が届かないときにふらっといなくなってしまうわけです。その人がいなくなったということは、ほぼイコールどこかのコンビニが万引き被害に遭うということなのです。ですから、いなくなったとたんに、ピンポンパンポーン、職員の皆さんでお手すきの方は支援室に集まってください、と呼ばれて、空いている人から近くの

コンビニを1つずつ回ってきてと言って。「私はこっちを回るから、御代田君、こっちを回って」と言って、1つずつ車で回って、トイレも確認して、たまに見つけて「ああ、まだ盗んでないんですね」と言って一緒に帰ったり、そんな日々が続きました。それはほんの1エピソードですが、そんなドタバタの日々でした。

加えて、中には介助が必要な人もたくさんいるので、普段は入浴の介助、排泄の介助、食事の介助といういわゆる三大介助に結構追われているような日々なのです。職員も日中、100人に対して実際現場で直接ケアをする職員は9人、10人なのです。地域に出て万引きするぐらい元気な人もいる状況ですから、全員が全員介助が必要というわけではないのですけれども、なかなか介助にも手が追われるという日々で、加えて先ほどお伝えしたように、1週間に1人入ってきて1人出て行く。出て行くときも準備が必要ですし、入ってくる人を受け入れるのにも、昨日まで路上で寝ていたみたいなのもいますから、受け入れるだけでそれなりの時間とケアが必要な方の受け止めとか、100人が1つ屋根の下に、いろいろな人が住みますので、けんかもトラブルも絶えないのです。ですから、介助に追われながらも、こっちではけんかを止め、こっちでは新しい入所が決まったのでベッドの受け入れをし、と思ったらちょっとこの人がいないから探してきてほしいと言われたりしてみたいな、そんなバタバタな日々が始まりました。こんなにバタバタなんだと、自分が働いて、こういう施設でいろいろな人のいろいろな生い立ちとか生きづらさにもうちちょっと近く触れたいなと思っていたけど、忙しくてそんな余裕はないなというのが正直なところでした。

そのような中で1カ月ほど過ごしたのですが、働き始めのときにある印象的な方がいらっしゃいました。日野さんという方です。この方は記憶喪失でやってきた方でした。記憶を失っているので当然名前も分からない状態で、日野町だから「日野さん」と仮名で呼ばれていたのです。実際は別の名前なのですけれども、そういう形で市町村の名前になぞらえて仮名を付けて呼んでいました。記憶喪失状態とはどういうことだと、日本でそんな人がいるのかということを疑問に思われる方もいると思います。当時の僕もそれはいったいどういうことですかと、身元証明書とかがあるでしょうみたいな、この社会でそんなことが起こり得るんですかみたいに関心したのですが、本当にそうみたいで、記憶喪失状態で交番で保護された方です。最初、何にも分からなくなってしまって交番に行ったのです。名前も分からないから助けてほしいと言っても、おまわりさんもそれは酔っぱらいと勘違いして、こいつどうしたと、頭を冷やしてからまた来いと言って追い返したらしいのですが、また同じような訴えを翌朝もしてきて、ちょっとこれはおかしいということで、市役所を経由してひのたに園にやってきたという方で、持っていたのがSuica1枚です。しかも無記名のSuica、ただお金がチャージできるだけの。そのSuicaの乗車履歴を照会しても、

20分ぐらい離れた駅から乗ってきたということしか分からず、名前も分からないし、住所も分からないし、何の仕事をしているのかも、親戚とか知り合いの連絡先も、一切何も分からない。もう人間であるということだけが分かるという状態でやってきたので、やむを得ず仮名で呼ばれていて、仮名でいろいろ行政手続きも進めていたという方でした。そもそも、いつ、なぜ記憶喪失になったのかもよく分からないと。でも、結構この方はガタイも良く、コミュニケーションは全く問題なく取れて、口数は少ない寡黙な男性だったのですけれども、温和でコミュニケーションスキルも高い人でした。ひのたに園では作業班というのがあって、仕事を含めた社会復帰を目指している方が生活リズムを整えたり仕事で基本的なリズムに慣れていくための活動として作業班というのをやって、平日の大体10時から4時ぐらいの4時間ぐらいこういう作業をするという、わずかですが工賃を稼いで還元していくというようなことをやっていて、こういう班に所属していました。僕もちょうどこの班を仕切ることになりまして、おまえもここの班の担当だと言われて、10人弱のおじさま・おばさまたちの中に弱冠22歳の大学出たてのペーパーの僕が、一応指導員として前に立って、皆さんラジオ体操を始めましょうとか、誰々さんは何番の作業に、誰々さんは何番の作業にと言って指示を出しながらやっていくわけです。不慣れながらも緊張しながらやっていたわけですが、ちょうど日野さんもそこに参加していて、日野さんは比較のお行儀よく参加してくれていたのですが、結構やんちゃな方もたくさんいるのです。こんな若い小僧なんかに仕切られてたまるかという雰囲気をつつおじさんたちもいて、それは分かっていたのですが、やはり僕も職員だからと思って、いろいろと口を出したり作業の手順を変えたり、こっちのほう絶対効率的なのと思って勝手に変えて、誰々さん実は変えておきましたとかということが続けていたら、ある日、何にも分からんやつが手を出すじゃねえ！というふうに、やんちゃなおじさまにパチンと言われてしまいました。職員は僕1人だけでみんな利用者、みんな50代、60代で年上、怒られて僕はもう縮こまってしまって、ああ、すみませんとかと言って、ほかの利用者の人はみんな関わりたくないから知らんぷりという逃げ出したくなるような状況がありました。最終的には解決したのですが、そのときに日野さんから一言、みんなが解散した後、「おまえはちょっと真面目過ぎやで。肩の力を抜くんだべ」と、ポンポンと肩をたたいてくれたのです。当時、東京から1人滋賀県にやってきて、誰も知らない施設に飛び込んで、自分の意思ではもちろんあるのですが、何かせわしない日々で、ずっと緊張していた自分の緊張の糸がぷつんと切れるようなタイミングが来ました。

救護施設は「救って護る」と書くじゃないですか。さっき言ったような無い無い尽くしの方、日野さんなんて名前も分からない、もう無い無い尽くしの頂点みたいな人がやってくる施設ですから、利用者は基本的に無力で、一方的にケアをしなければいけない存在だと、就職したときはどこか思っていたのです

けれども、日野さんからそういうふうになんか声をかけられて、いろいろ失った人が他人を配慮する心や余裕を持っているんだなという、何かすごいことを発見したような気になって、生きる力を本当のところ教えてくれたり肯定してくれているのは利用者のほうなんだなというのを感じるような出来事でした。

そんな就職したての日々でした。最終的に日野さんはどうなったかという、施設内にカレンダーが貼ってあって、そこに東北の山の写真が載っていたのですが、それを見て、この山知っているといい出したのです。「本当ですか」と。「知っている」と。たまたま東北の同郷の職員がいて、「誰々さんこの山知っている？どこらへん？」と。「ああ、そこや」といい出して、結局そういうのでしょとずっと記憶が戻って行って、高校の名称が分かったので、高校に照会をかけました。この顔の、たぶんこのぐらいに卒業した卒業生で、名前は分からないけれどもこの顔になりそうな学生さんはいましたかみたいな照会をしたら、名前が分かってご家族と連絡が取れて実家に戻られたというような形で戻られていきました。そんな形で無い無い尽くしの方が入って、日野さんの場合はすごくストーリーが完成されている感じがありますけれども、そういう形で一定期間、体と心と、いろいろな行政手続きや社会復帰に向けた準備をして出て行くと、そんな施設です。

職員さんのことをちょっとご紹介したいと思うのですが、職員は利用者100人に対して総勢35人ぐらいです。園長、副園長、入退所を担う相談員という役割の人、看護師さんもいらっしゃいます。僕がしていたのは生活支援員という、現場のいわゆる介護施設で言う介護士さんとか、そういうような立場の職種です。基本シフト業務で週1回の泊まりをして、夜間は職員2人で100人の見守りです。事件が起こると大変です。担当利用者というのもしあって、大体1人につき7〜8人、これは1年目の職員もベテランの職員もみんな変わらず7〜8名付いて、救護施設を利用するにあたっての支援計画、どういう目的でこの施設を利用してどういう状態になりたいのか、そのためにどんな支援が必要なのかみたいなところを、責任を持って考えていく立場です。加えて、行政手続きとか救護施設内での生活とか金銭面でのサポートもしたり、日々の相談相手とか愚痴聞き役にもなったりという感じで、園内生活の相棒みたいな感じで、担当利用者と担当支援員、「担当」と呼び合ったりするのですが、そういうのが位置付いて支援をしています。

僕にも8人の男性担当利用者が付きまして、その1人でとても印象的だったのがマルヤマさん（仮名）という方でした。この方は小柄な60代の男性で、救護施設に僕が就職したときには5年ぐらい暮らしているという方でした。担当は毎年変わるので、次は誰が自分の担当支援員になるかと。学校のクラス替えで次の担当の先生は誰だろうみたいな感じで、みんな結構気にしているのです。3月31日にバーンと貼り出されると、みんなそこにワッと駆け寄って、ああ、またこいつかよとか、こいつは新人か、大丈夫かとか言いながらみんなや

るのですけれども、僕は新人だったので、「御代田君、ワシの担当になったんだからな、毎日あいさつせなあかんで」というような感じで、ずっと言うてくるようなおじさんでした。お金の管理がちょっと苦手だったので、毎月の貯金額とかおこづかいとかを僕のほうで管理させてもらいながらサポートさせていただいた方で、もともとこの方は滋賀県内で6年ホームレスをされていた方でした。その後ひのたに園に来たという方で、ホームレスになる前は派遣の仕事を続けていたのですけれども、不景気で職がなくなって路上で生活せざるを得なくなったという方です。

ホームレスといったら皆さんイメージがつくと思いますが、実際路上の生活ってどういうことなんだろうと自分でも疑問がありまして、関係が築けてきた頃に、どんなふうに食事とかをしていたんですかというふうに聞いたら、「コンビニで弁当をもらって食べていたんや、ローソンってあるやろ、そこの店長さんが裏に來いって呼んでくれんねん」と言って、コンビニで弁当をもらっていたりとか。お金はどうしたんですかと聞いたら、缶拾いをしていたと。いわゆる缶拾いです。缶拾いにも縄張りがあるらしくて、「自分の縄張りではないところの缶を拾うと、誰のを拾ってんねんと怒鳴られることもあるわ」と。「千円もうけようと思ったら大変なこっちゃ、1日ばかりで缶をつぶして足がむくんでしまうわ」というような形で、ホームレス時代のことを教えてくれたり。こういうふうに明るく教えてくれるのですが、これを6年続けてきたというわけですからなかなか大変な日々ですね。大変なことはなかったんですかと聞いたら、やっぱり寝床を探すのが大変だったと。寒いときは暖をとるためにお店の駐車場とかで寝ていたそうなのですけれども、「若いやつなんか横を通ると、ひそひそ、おい、寝とるととかかわいそうにとかと言いよるんやわ」と。「そりゃそうやろ、知らないおっさんが寝とったらびっくりするがな」というふうに、すごく明るくしゃべってくれるのですが、そういう1日を6年間過ごしてきたということを、その人と何回かに重ねて会話を取るうちに僕もようやく理解できてきたのです。

ホームレス生活を送っていた人は、救護施設に本当に何人もいます。一人一人のケースファイル、支援室に100人分のケースファイルがあって、そこに一人一人の簡単な生い立ちが最初のページに載っているのです。大体ホームレスをした人は、平成何年から平成何年にホームレス生活、大体このへんでみたい入った、この人はホームレス生活3カ月ぐらいたとか、この人は長いな、10年かとか、この人は数日ぐらいたとか、結構僕らも見慣れているのでそういうふうに簡単にあっさり受け止めてしまっていたのですけれども、やはりいろいろ考えてみると、どこで寝るのかとか今日食事がとれるのかとか、道行く人にどう思われるのかとか、予測がつくこととか頼れるものがない、まさに本当によるべがない状態で1日1日を過ごすことを6年間続けていたんだなということを、改めて感じるような出会いでした。「生活歴」というふうに

簡単にまとめられた中のホームレス生活何年というような数字の奥、ホームレス生活だけではないですけども、そういうざっくりまとめられた、サマライズされた、要約された人生歴というものの奥をやはり想像する必要があるなというのは、この人との出会いもそうでしたが、働きながらすごく感じていたことです。

この人はホームレス生活をなぜ6年も続けていたんだろうというのも気になっていました。生活保護があるじゃん。何で生活保護に頼らなかったんですかと聞いたら、生活保護を知らなかったと言うのです。そんなことがあるのかというふうに僕もちょっと思ってしまったのですけれども、じゃあどうやって知ったんですかと聞いたら、若いホームレスの方が教えてくれたそうです。「マルヤマさん、生活保護っちゅうのを知っとるか」というふうに聞いて、マルヤマさんは軽い知的障害がある方なので、たぶん片仮名で「セイカツホゴ」という言葉の響きとして受け止めて、何かそういうのがあるんやというふうに聞いて、その若いホームレスが「生活保護っちゅうのはワシらの権利やねん。マルヤマさん、市役所行ってみい。でも、洗いざらいほんまのことを話さなアカんで」というふうに言われて、マルヤマさんも年齢も50代後半になってきてちょっとこのまま路上で過ごしていくのはしんどいなと思っていた時期だったみたいで、ちょっとそいつの言うことを信じて行ってみようと思って市役所に行ってみたらいいです。そのまま自分の状況を話して、路上生活を続けてきた、派遣の仕事をしていたが辞めざるを得なくなったというところとか、ご家族の状況とか、いろいろ洗いざらい話して、その窓口担当者の判断で救護施設に行きましょうということでひのたに園にやってきたのです。生活保護という名前や存在さえ知らない人が、急に市役所に行ってもそのまま救護施設に連れて行かれるというようなところで、マルヤマさんの「ひのたに園」というところがありますねん。ここしかありませんからね」と、「いきなり何にも言わずに連れてきはったわ、殺されると思うたわ」と言っていました。殺されると思うのも仕方ないなと。マルヤマさんの的には刑務所みたいなのに連れて行かれると思っていたみたいです。まあ、でも衣食住があって雨露をしのげるんだったらいいかという思いでいらっしやったみたいなのですけども、実際本当に人生につまづいて体も心もヘトヘトの状態の人が救護施設にやってくる道中は、生活保護を申請して洗いざらいのことを話して、突然知らない土地の知らない山奥の施設に連れて行かれるというのは、やはり相当ストレスフルな体験ですし、来る人たちというのはそういう感覚で来ているんだなということを、受け止める側はもう何人も、1週間に1回受け止めているのでどこか機械的になっているところがあるのですが、そういうことをきちんと想像して対応しないとというのも、このマルヤマさんから学んだことでした。

生活保護に関してまとめると、当たり前の権利という形で位置付けられていますけれども、生活保護を受給するために必要なこととしてマルヤマさんから

教えてもらったのは、生活保護の存在をそもそも知っているということです。その上で申請場所とか申請方法を知っていて、窓口に行って自分の状況を客観的に説明できると。窓口で説明した後のさらなるハードルとして、資産調査、自分がどれくらいお金を持っていて、お金や不動産とかの資産だったり就労の可能性、本当に仕事ができないのかというところ、できないことを証明するために、病気を持っていますとかちょっとけがをしていますとか、場合によっては医師の診断書が必要になったりという手続きがあります。扶養照会は、最近一部緩和されましたが、本当に頼れる家族がいなかったのかを最終的に確認するのです。頼れる家族がいるんだったらわざわざ税金から出さないで家族に頼りなさいという判断になるので。ちょっと前までは、窓口で家族の連絡先を窓口担当者が聞いて、その場でポチポチと電話をかけて、誰々さんのお兄さんですかと言って、マルヤマさんの場合もお兄さんに電話をかけたそうなのですが、こうこうこういう状態でいらしたんですけどちょっとサポートは難しいです。かねみみたいな形で聞くのです。こういうのってどうですか。自分が生活保護を受給する状況になってしまったということ、窓口に来ているということが、親やきょうだいに基本的にはやはり知られたい情報ではないですよ。知らせたかったら事前に言っていますよね。これで実際にサポートを頼めるような家族に出くわすことはほぼないのですけれども、そういう手続きが儀式的に残っていて、こういう資産調査とか扶養照会というものが、いろいろな困った人たちがSOSを出すときに結構ハードルになってしまって、そもそも生活保護や救護施設自体にたどり着かない人もたくさんいるということは現実かなと思います。

これに関して、最初に言ったようにニュースでも取り上げられていましたが、「刑務所から出てきた人もいますか」と。「います」というところなのですが、刑務所と救護施設は切っても切り離せない関係にあるのです。刑務所から来る人たち、罪状はいろいろです。万引きとか窃盗とか軽い犯罪が比較的多いのですけれども、特殊詐欺とか、中には強盗とか傷害致死という方もいらっしゃいました。数年、数十年の刑期を終えて、救護施設を経て地域に戻っていくという方です。比較的多いのは、少額の窃盗を繰り返して複数回受刑する人です。反省してないじゃないかという気になるのですけれども、実は反省とかということは本人はあまり関係がなくて、地域で生きていても仕事がないし頼れる人もいないから、半分わざと、困ったら捕まってもいいやという思いで窃盗をして、刑務所に行けたら衣食住は保障されているしとりあえずここで暮らすかということをやっと繰り返す。そうすると刑期はどんどん延びていきます。おにぎり1個でも、最初は数カ月というのが3年とかになるのですけれども、何十年と刑務所歴・受刑歴を繰り返す人が多いです。受刑者の約4割が軽い知的障害を持つということもいわれたりしていて、現実を見渡すと、やはり救護施設から見える刑務所というのは、この今の社会の中では刑務所自体が疑似的なセーフ

ティネットとなってしまっているのです。「福祉はやくざと風俗に負けた」と、ある有名な福祉実践家が言っているのですが、本当に言い得て妙だなという感じで、本当は福祉が衣食住を提供しなければいけない。あとは生きがいですね、自分が有用だ、役割を持っていると思えるような瞬間とか体験を与えなければいけないところなのにできていない、ないしはSOSを出しやすい仕組みができていない。その結果、男性はやくざに、女性は風俗に流れていく。風俗は反対ですね、お金ももらえるし、自分の容姿を褒めてもらえる。やくざもそうです。衣食住を保障してもらえるし、何か組織の役に立つことをしたらシンプルに褒めてもらえる。自分には小さくても役割があるんだと、誰かのためになっているんだということが実感できる場所に、人はどんどん流れていくのです。ですから、救護施設が本当は担わなければいけないところをこういう場所が担っている現状があるということは現実かなと思います。

一方で、犯罪被害を負われた方もたくさんいて、あるとき不思議だったのが、オレオレ詐欺で1千万とられてしまって一文無しになってしまった女性と、恐喝で2500万円を脅し取って受刑した人が、一緒にテーブルで楽しそうにご飯を食べていたのです。もちろんお互いのプロフィールは共有していません。職員はそれはプライバシーに関わることなのであけすけにはしゃべらないので、もちろんお互いは知らないと思いますけれども、そういう形で最後のセーフティネットというのは、極端な加害も極端な被害もどちらもひっくるめて共存しているような場所なんだと、本当に日々働いていて感じる場所でした。

今までは新しく入ってくる人のことをお話ししていたのですが、実は先ほど、最初に数十年間暮らしている人もいますとお伝えしたと思うのですが、実際に本当にいらっしゃいます。今もいらっしゃいます。一番印象的だったのがこのヤスエさん（仮名）という方で、入所番号が7番だったのです。入所番号は延べ番号なので、今はもう2000番とか3000番とかになっているのですが、7番ということは7人目の入所者で、初日にたぶん30人ぐらい入所しているのです、そのうちの1人だったわけです。ひのたに園で一番の古株。1970年に入所しているわけですから、僕が働いていた時点でもう50年ぐらい、まだたぶんお元気に暮らしているのです55年ぐらい暮らしている方でした。口癖は「この人何ちゅう名前」と、この人って、目の前の人に向かって「この人」と言ってくるのです。「この人何ちゅう名前」と。「あなたは何ていう名前ですか」と言っても「この人何ちゅう名前」と言ってくるようなおばあちゃんです。

こういう人がどのぐらいいるかというと、ちょっと古いですが、2019年のひのたに園の在籍期間をマッピングしたグラフになります。ちょっと見ていただきますね。

一番多いのが、この上の四角で囲った「3年未満」のところで、大体合計で50人、半分ぐらいが3年未満の方です。比較的最近入ってきた方。5年未満とか10年未満とかもたくさんいる一方で、35年以上となるとドッと増えて、13人

います。これが開設当初に入ってきた方たちで、この1人がさっきのヤスエさんという方になります。

開設当初はどんな施設だったのかというと、1970年の6月に開設したわけですが、まだ障害のある人を受け止める福祉サービスが世の中にほとんどなかった時代です。ほとんど何もなく、基本的には家族が受け止めなければいけないし、何らかの手当も基本的にはないので、家族が何とかぎりぎりの状態で世話をしているというような時代で、そういった障害のある人を受け止める施設が世の中にたくさん、どんどんできてきた時代です。その中の1つとして救護施設もできて、基本的には一生を過ごす場所、一生面倒を見てもらいなさいねという形で20代前半とか10代後半の若い障害のある方たちがドッと100人入所したような始まり方の施設になります。

当時、50年前に開設に携わった職員さんというのも実はまだご存命の方もたくさんいらっしゃって、お話を聞いたことがあったのですけれども、そういう方いわく、「障害のある人は当時は家族の1人に数えへんと。要するに座敷牢という人もいはった」と言っていたり、家族からはこんな連絡があったということで紹介してもらったのがこれです。きょうだいが結婚することになって、でも相手方には隠しているんで急いで入所させてほしいと。だから面会の通知や行事のお知らせを送らないでください、という感じで、家族の中でも隠していて、もうどうしようもないから施設に入れてくださいという形で入ってきた方もいらっしゃいました。これ以外にもびっくりしたのが、いわゆる座敷牢で暮らしていて、基本的には外を出歩かないでずっと暮らしているので足腰の筋肉が弱ってしまって、基本ハイハイというかずり歩きみたいなのでできない筋力で過ごしていた方が、本来はもっと栄養をとって活動・運動すれば普通の人並みの体力が持てる人たちなので、施設に入ってからぐんぐん体力を取り戻していつて歩くようになっていくみたいな、「そういう人が何人もいはったわ」、みたいなことを言っていたのが印象的でした。こういう時代に入った1人が、さっきのヤスエさんになります。今も暮らしている人です。

ヤスエさんにインタビューをさせていただいたのがこちらです。お生まれはどちらですかと言うと「びわ町、川道」と、もう今は合併してなくなってしまった町なのですけれども、入所する前に暮らしていた、日野からはだいぶ遠い町のことを言っていました。いろいろご家族のことを聞いていいですかと聞いたら「男の子いはるわ、大津にはるわ、預けてあるわ」と。「赤ちゃん生まれはった。大津病院、大きな病院」と、こんなしゃべり方なのですけれども、男の子いはるわと言い出したのです。男の子いはるわってどういうことですか。「えっ、赤ちゃんがいるの？お子さんいるの？」と聞いたら、本当にお子さんがいるみたいなのです。入所されたのが22歳ごろだったので、入所する前にお子さんを授かって産んで、でも、このヤスエさん1人では育て切れない、父親がどこにいるか分からないという状態で、息子さんは乳児院に預けられてヤス

エさんだけ救護施設に来たというような形でいらっしゃった方だということが、インタビューで初めて分かりました。お名前は何ですかと聞いたら「ソウキチって名前。男の子で役場の人が付けてくれた。大きくなってはるわ、働いてはるわ」と言っていました。もう50年前の話なので、50歳なのでそれなりに大きくなっているんだろうなと思うのですけれども、でも実際ヤスエさんは、この施設に入ってから一度もお子さんとはたぶん会っていないのです。ちょくちょく、ここで暮らしているよとかこんな仕事をしているよというのは市役所を通じて本人に連絡は行っているんでしょうけれども、たぶん会ったことはない。こうやって息子と離れて、親とも離れて、1人知らない町からやってきて、救護施設で50年暮らしてきた人がいたと。今ご家族のことはどうですかと聞いても、昨日息子を産んだかのような「大津病院」というような感じで言って、今も息子を思い続けているような日々を暮らしている方もいらっしゃいます。この方だけではないです。皆さんが家族と離れて、さっきのマルヤマさんではないのですけれども、ここはどこなんだろうという状態で暮らし始めて、何とか自分の慣れた生活のルーティンやリズムを身に付けて過ごしてきている。この人なんかはもう全職員を見ているわけですから。70年に開設しているわけですから、全職員と全利用者を見続けて見送り続けて今も暮らしている。そういう人たちがいるんだということも改めて感じたところです。

こういうことをいろいろ知っていくと、本当に当たり前なのですから、どの利用者にも救護施設に入るまでの人生があるなということをつくづくと感じて、ただ一方で、日々バタバタしていて、どんな人生を送ってきたのかなてなかなか余裕を持って聞けないです。基本的には支援をする立場で、根拠に基づいた適切な支援をするのが私たちの仕事なので、どうやって関わればいいのかということで、支援が必要な部分とか入所に至った暗い過去を聞くことが必要です。ですから、入所に至った直前の、なかなか暗い過去ばかりが強調されて、支援者と利用者の関係性が固定化してくるような感じがあったり、施設に入ったときに地域での生活の履歴が抹消されて、とたんに「救護施設利用者」と、さっきワイドショーで取り上げられていたような「救護施設に住んでいる人」みたいなかつ書きの人になってしまうようなところがあるかなと思っていました。そんなときに出会ったのが「聞き書き」という取り組みです。もともとはこの六車由実さんの『驚きの介護民俗学』という本と出会いまして、民俗学者だった六車由実さんが介護施設で高齢者に聞き書きを通じて利用者の生い立ちとか地域の歴史とかを再発見していくような物語なのですけれども、これは面白いと思って、救護施設でもやってみようと思ったのです。レコーダーとペンとバイNDERを持って、いろいろな方にインタビューをさせていただきました。

ちょっと時間がないので駆け足になりますが、特に印象的だったのがこの方です。一度自死を決意されて、山に登られたけれども死に切れずにやってきた

ご夫婦がいました。派遣会社で2人で働いていたみたいなのですが、旦那さんのほうが仕事のいわゆるパワハラでちょっとうつ状態になってしまって「死ぬわ」と。「じゃあ、あんたが死ぬなら私も死ぬわ」と、山に2人で登って、細かい経緯は分からないのですが、でも山から下りてきたのです。交番にちょっともう行くあてがないんですよと言って救護施設にやってきた2人で、本当に見た目は普通の2人です。コンビニで缶酎ハイを買っていきそう、本当に普通の40代中間ぐらいの2人です。どうでしたか、どんな気分だったんですかといういろいろ聞きました。奥様のほうにお話を聞いたのですが、「私1人でよう生きてかんし、だったらもういいよ、一緒に死んじゃおうって、そういうふうになったの。もう駄目だね」と。いろいろあって施設に來たわけですが、この施設はどうですか、ぶっちゃけ暮らしやすいですかと聞いたら「いろんな人がおるよね。でも、声小さくなっちゃうけど、内心は一緒に入れられたくないと思ってたよ」というふうに言ってくれたり。この方はお2人とも、さっき言った作業班に参加されたり地域で就労、アルバイトをしたり、園内の作業も積極的にサポートしてくれたりして、徐々に体力も気力も取り戻して、大体半年ぐらいで、いい社長さんに巡り合えて仕事に戻っていくことになって、退所する2日前ぐらいにいろいろ話を聞いたら、こういうふうにご返答くださいました。施設での生活はどうでしたかと聞くと、「もうね、死ぬっていうことは考えないで、やっぱり笑って普通に暮らしたい、過ごしたい。子どももないし、向こうもうちも親と疎遠なもんやで、だから本当に2人だけなの。だから余計に、2人で笑って過ごしたい。で、たまに焼肉食べたりおすし食べたり、そういうふうにしたいくね。でも、一番の望みは笑って過ごしたいっていうだけ。笑えるようになったから、ここで」というふうに、本当にうれしい言葉を言ってくれました。

救護施設は100人の利用者と30人の職員の、130人の大所帯です。人口密度もかなり高いですし、決して暮らしやすい場所とは言えないと思います。僕もあそこで暮らせと言われてたら、ちょっと自分は難しいなと思うのが正直なところ。一方で、人間に囲まれて、職員は出勤したらすれ違う利用者の皆さんに「おはようございます、何々さん元気ですか」と声をかけるわけですし、利用者同士でもそういう声のかけ合いがある中で、人は時間をかけて回復していくんだなというのを感じさせられた2人でした。

ほかにもいろいろ聞き書きをさせていただきました。ちょっと詳細は省かざるを得ないのですが、ブラジルからやってきた人、この人は保険証も持っていなかったのですが、山でイノシシとかサルを食べて生きてきたおじさんとか、コロナ禍でパチンコ屋が最初に休業したじゃないですか。パチプロが収入を失ったとって生活保護で来たらしいのですが、そういう方とか、あとはHey! Say! JUMPのマネージャーをしていたと語る男性、結局これはうそだったということが分かったのですが、いろいろな方に聞き書きをさせてい

ただきました。聞き書きは、その人が生きてきた分厚い歴史とか生い立ちとかを改めて感じられて、こういう施設に来るような人なので自分の知らなかったいろいろな暮らしの形とか社会の側面にも気付かせてくれますし、支援してあげる立場というところから聞かせてもらうという立場に一瞬逆転することで、ちょっと関係性に風が吹くというか、お互いが心地良い関係になるというような、ポジティブな効果が自分にはあったかなと思いました。

最後に「救護施設から地域へ」というところで、どんなところへ皆さんは出て行くのかというところですが、最終的には皆さん、年間70人出て行かれますが、アパートとか寮付きの派遣の仕事とか、ご自宅に戻られる方もいますし、介護福祉サービスとか障害福祉サービスを利用して施設に行かれる方もいらっしゃると思います。ひのたに園ではそのためのサポートもしていて、物件探しとか1人暮らしの体験とか。体験用の1人暮らしの学生用ワンルームみたいなのも施設外にあって、そこで1カ月練習して送り出すみたいなことをやったりしています。金銭管理の練習、大体食事にはどれぐらいのお金が使えるのかみたいな相場観を。施設の中では基本的に給食が出てきてしまい、地域で1人で暮らす生活のシミュレーションというのがなかなかできないので、そこを知ってもらったり。退所した後もアフターサポートを充実化させているのが最近です。電話連絡をしたり、定期的に訪問したり、ひのたに園の活動に定期的に足を運んでもらったりという形でしています。

これまでひのたに園も、刑務所と同じように、送り出すときにもう二度と来ないように頑張りなさいみたいな感じで送り出していたのですが、そうはいつでも何度も来る人もいます。冬になったらもう寒くなったからちょっと来てしまいましたとか、またちょっとやらかしてしまいましたとか、またお金がなくなっちゃいましたとかという人もいますので、また来てもいいから何か困ったらすぐその場で連絡をくれと、困ったら行くからというような形で、また困ったらいつでもどうぞというスタンスに変えることで、むしろ逆に最悪の事態を未然に防げるようなスタンス、良い結果も生まれてきました。

地域に送り出して日野町内でアパートを探す人もたくさんいるので、地域との関係というところもすごく大事になってきます。最近ではこの右下のところ、地域の畑を借りた農業活動とか、日野町は信楽という町が近くにあって信楽の陶芸家さんが住んでいたりするので、その方を講師に招いて利用者の方の陶芸活動をやったり、いろいろ地域の方を巻き込んだ活動・取り組みというのを進めています。徐々に、得体の知れない迷惑施設から、にぎやかな近所さんという、地域の目がシフトチェンジしているのかなというところです。

広報誌も、僕が就職した当時の広報誌はこんな感じだったのです。何となく福祉施設の広報誌ってこんな感じだよなとみんな思うのでしょうかけれども、なかなか利用者の顔は見えないですね。100人住んでいて職員が30人いて、僕がしゃべってきたようなこれだけのドラマとトラブルが日々生まれているよう

な施設で、習字とか生け花とか、ちょっとこれは味気ないだろうと。地域の人
も、理解を促進しようと思ってもこれを見たら分からないよと僕も思っていた
ので、いろいろと提案してアップデートして、最近の広報誌がこれです。顔を
ドンと出したり「人生いろいろ」というコーナーを設けて、聞き書きで聞かせ
てもらったような内容をすごくぎゅっと短くして実名で紹介したりして、地域
に顔が見えるような施設・利用者になってもらえるような取り組みもしたりし
ています。

最近、子ども食堂も始めたのです。「つどえば」です。子どもに限らず地域
のどなたでも参加可能という形にして、子どもは無料、大人は1食100円です。
食材は農作業でとれた野菜を使って、準備・調理・おもてなしは利用者も元気
な人は積極的に関わってもらおうというようなところなんです。こんな感じでサラダ
をつくっているところですけども、これは、真ん中は地域のボランティアの
方ですが、両サイドは利用者の方です。今まで活動がなくて、ジーンと施設で
閉じこもって、時々やってくる塗り絵の先生みたいな人と一緒に塗り絵をして、
ボーッと自分の役割はないなと思ってもんもんと暮らしていた人たちも、どん
どん地域に出て子どもたちのご飯をつくるような役割を任せると、皆さん本当
にいろいろなご経験をされてきた方なので、本当に手際よくやってくれますし、
子どもの扱いも下手な職員なんかよりよっぽど上手ですし、そうやって救護施
設利用者ということを意識せず救護施設の中の人と外の人が絡んでいく、接点
をつくっていくような感じなんです。子どもたちもいますし、この左がお父さんら
しいです。この姿はやはり大事だなと思います。

さっきのこの住民説明会の姿は誰の顔も見えていない。誰の顔も見えていな
くて、基本的には一方的にケアすべき、税金を投入して支えてあげなければな
らない人、何でそんな人のために税金を使わなきゃいけないのというような、
こういう世界観からこういう世界観にどんどん変えていかなければいけないな
というのは思います。最近はバリアフリー演劇といって、劇団を呼んで、壇上
に上がってもいいというすごいバリアフリーな演劇なんですけれども、地域の
子どもたちとかいろいろな市民の方も呼びして、壇上にひのたに園の利用者
さんとか地域のフリースクールの子どもたちとかが上がって交流しているとい
うようなことも続けている状況です。

こんな形で、厄介な人が集まる施設から地域のケアの、どんな状態の人でも、
困ったらひのたに園が手を差し伸べてくれる、救護施設が手を差し伸べてく
れるというような、地域のケアのハブにどんどんしていかなければいけないな
というのと、今の社会でどんどん不可視化されているというか、見えない場所
にどうしても閉じこもってしまいがちなケアの営みというものとは自然な形
で出会えるようなチャンネルを増やしていくということが、これからの救護施
設の役割なのかなと思います。

これが最後にお見せしようと思った写真で、こんな方が暮らしています。こ

れは運動会の様子で、みんな白組の鉢巻を巻いていて、真ん中にちょこんと座っているおばあちゃん、この方も入所して50年ぐらい経っている方です。本当にいろいろな表情を持った一人一人の方が暮らしているということを伝えていくことが大事かなと思いますし、もし今日ご紹介できなかった方のことも知りたいという意欲的な方がいらっしゃいましたら、本の中にも詳しく書いてあるので、お手にとってもらえればと思います。

すみません、ちょっと長くなってしまいました、ご清聴ありがとうございました。

池田：

御代田先生、ありがとうございました。

限られた時間にはなりますが、もしよろしければフロアのほうから何かご質問等ございましたら、せっかくの機会ですので声を出していただければと思います。いかがでしょうか。

御代田：

すみません、長くなってしまいました。何でも大丈夫です。下世話な質問でもいいです。

池田：

たぶん味わって考えてくださっているかと思いますので、その間に。

先ほちょっと実は控え室でも少しお話しさせていただいたのですが、私としてすごく気になるのは、御代田さんがこの道に入ろうと思った最初のきっかけで、いったい何が。「障害者のリアルに迫る」ゼミというのは結構その道では知られたものだと私は思っていて、何度か耳にはしたことがあって。詳しくは知らないのですが、そういうものが目の前にあったとしても、全くそこに視線が向かない。特に大学で教員をしていると、御代田さんの今日の講演会のポスターもキャンパス中あちらこちらに貼っているのに、来ている学生の姿は本当にごく限られているということを見ると、いったいそこにふっと目が留まったというのは、留まらない人との違いは何だと思われますか。本当に、個人のお考えを聞くしかないかなと思うのですが。

御代田：

ありがとうございます。

人によっての違いというよりは、どういう入り口で出会うかのほうが重要かなとは思っていて、僕はやはり一言で言ってしまうと好奇心だったのです。自分が悩んでいて、この答えが知りたい、何かヒントが欲しい。そのときに、障害がある人の話だったら何かヒントになるかもしれない、何か別の切り口のアイデアがもらえるかもしれないと思って、フットワークが軽いほうだったというのもあると思いますけれども、ふらっと行ってみたというのがきっかけ。

やはり最初に感じたのは、面白いということだったのです。この人たち面白い、この人たちの話を聞いていると何か元気になると。飲み会も行って、毎回

お酒もおいしいし、ゲラゲラ笑いながら、人間ってやっぱ面白いなということを感じられる、そういう入り口の出会い方というのは、もっと増やしてもいいかなとは思います。

例えば、車いす体験とかってあるじゃないですか。あれって面白いのかなというのが正直なところで、やらされ感がどこかあるとやはり教えられる側は引いていってしまうし、自分で能動的に学ぶとか面白さをつかみ取るみたいなのが難しくなってしまうなと思います。

本当に障害の世界、福祉の世界は、もっといろいろな面白さとか切り取り方がある中で、やはりもっと学生の好奇心を刺激するような、興味を持って何となくのぞいてみたくなっちゃうみたいな形で発信をしていく、理解を深めていくというアプローチが大事かなと思います。

池田：

ありがとうございます。

はい、後ろから。

フロア（A）：

トワイライトスクールの基幹専門員をしまして、今日午前中仕事があって、そこから来ました。子どもの施設で、非常勤で仕事をさせていただいた経験もあります。ささやかですが、不安定ながら全部子どもの仕事でやっています。

ずいぶんいろいろな人をオーケーにしてくれる救護施設なんだなと思いました。でも、どうやってやっているんだろうというふうに、すごく難しいだろうなと思いました。

私なんかはある養護施設で子どもたちの宿題を教えるというのをやって、それがすごい転機になったのですが、でもこれはすごいなと思って。少し個人的ではあるのですが、いろいろな人がオーケーになる中で、例えばギャンブルのようなことがやめられなくてやってくる人と記憶障害の人がみえたということですけれども、子どものある施設でやったときも記憶が戻る瞬間があって、そういうときは割とちょっと危険なことが起こりそうだったのです。記憶障害の人やギャンブル、これも依存症なんだろうなと思うのですが、そういう非常にメンタル的な、心理寄りの、例えばうつとかきちんとした診断名がばっちり付くのではなくて、ちょっとそういう人たちについてはどうやってやってみえるのでしょうか。

御代田：

そうですね。本当におっしゃるとおりで、誰も断らないと言うと聞こえはいいのですが、本当に大変です。ダイバーシティは行き過ぎるとただのカオスになってくるので。僕が就職した当時は本当にカオスで、刑務所出所者が10人近くいて、結構やんちゃな人たちなのです。やんちゃな人たちというのは、やんちゃな人が隣にいると呼応してしまってもっとやんちゃになるのです。そ

して、ちょっとずつグループ化みたいのが始まって、抗争みたいのが始まって、もうしっちゃんめっちゃかになっていたりしました。

いろいろな難しさを抱えた人たちですね。ギャンブル依存の方は僕も担当利用者の方にいましたし、パチンコに行っちゃ駄目と言ってもいなくなってパチンコで大負けして怒鳴り込んで帰ってくるとか、精神障害の方、急性期の方はいらっしやらないですけども、施設で暮らす中で統合失調症の症状がバーッと再発してしまう人なんかもいたりしました。

そこは職員だけ頑張ればいいという問題ではないし、カオスになればなるほどほかの利用者の過ごしにくさは増していくわけですから、そこは施設としてコントロールしなければいけないところかなと思います。うちの施設でも性犯罪歴のある人はやはりちょっと受け止めは慎重になっていました。女性棟と男性棟が、本当に何のセキュリティもなく入れてしまうところだったので、それはそれでいいことだとは思うのですけれども、そういう細かい調整はしたりしながら、何とか多様性とカオスのぎりぎりのところで均衡を保っていたようなところがありました。

すみません、質問の答えになっているかが。どうですか。

フロア (A) :

大体分かります。ありがとうございます。

池田 :

ありがとうございます。

そのほかいかがでしょうか。せっかくの機会ですので、どうぞご自由にご発言いただければと思います。

フロア (B) :

今日は貴重なお話をありがとうございました。

最初の先生のご質問とちょっと重なるところがあるのですけれども、関東の大学で教員をしております、学生たちのキャリア教育というのが今、非常に重視されています。その中で、お話くださったような形、自分の生きがいを見つめて、収入とか肩書きとかそういうことに捉われずに自分の行く先を決めるということが一番本当は大事だと思うのですけれども、大学としてはやはり就職率であるとかメジャーなところに就職させようというような。ですから、いくら学生たちに興味・関心を、福祉の世界に導くようなことをせっかく入れ込んでも、結局大学全体として、あるいは社会全体として、経済合理性といったところの価値がすごく強い中でどうしたら、まあ似たような質問になってしまうのですけれども、本当に自分の人生にとって価値があると思うことと向き合って、周りのそういった雑音に捉われず、興味があっても結局土日だけやったらいいんじゃないかとかそういうことになってしまわないような、そこでキャリアをちゃんと切り開いていくことができるように、私たちに何ができるんだろうという。

すみません、ちょっとまとまりのない質問なのですが、よろしくお願いいたします。

御代田：

そうですね。僕にお答えする権利があるのか分からないですけども、1つ、僕自身よかったと思うのは、大学でじっくり自分が何をしたいかと考える時間と余裕があったということは大きかったです。卒業後のことに追われて、1年生、2年生の頃から何かをしなければいけない、就職の準備をしなければいけない、資格の勉強をしなければいけないとなったら、たぶんこういう出会いはない、新しい出会いは開かれないと思うので、それがまず大事だなと。最近就職の準備のスタートが早過ぎて学生も大変だなと思いますけれども、何かそういう就職活動とは別の軸で社会と出会うという時間とか機会はまず大事だなと。なかなか福祉は、やはりお給料もそんなに高い職種ではないし、最近特に一般的な企業との差がどんどん開いている中で、やはりこちら側でできること、福祉サイドができることとしては、働いて面白いんだというモデルをどんどんつくっていくことだなと思います。単に資格が取れて、安定的にお金が稼げるよというところだけではなくて、キャリアアップができて、自分のこんな力が身に付いて、こんな役割を背負っていける、何年でこのぐらいになれるというようなモデルをどんどん示してあげるとか、そういうことが必要なと思います。学生のせいばかりにしていってもなかなか物事は進まないで、そういうことが大事かなと思いました。

フロア（B）：

ありがとうございます。

池田：

ありがとうございました。

ほか、いかがでしょうか。

フロア（C）：

ご講演ありがとうございました。南山大学人文学部3年生の学生です。

感想になってしまうのですが、利用者さんそれぞれの歴史的な背景だったり今までの生き様を見ていくというので、すごく大事だなと思ったのがあって。昨日僕は大阪に行って、いろいろなところを歩いていたのです。そうしたらホームレスの方々が出て、最初僕がそのとき思った印象は「怖」なのです。僕から見たらその人たちはただのホームレスの人という認識でしかなくて、だから見えている状態、僕の見えている目線で言うと、その人たちはホームレスという情報しかなくて、だから怖くなってしまうのですけれども、こういった救護施設の中でホームレスのAさん、ホームレスのBさんというので、今まで生きてきたその人のヒストリーというか、そういうところが分かってきて初めて、その人はただのホームレスの人とか厄介な人とかだけではなくて、Aさん、Bさんというそれぞれのその人自身が形を帯びて見えてくるのかなと思ってい

て。最初のニュースのところでもあったのですけれども、あの情報だけだとホームレスの人ってちょっと怖いよねとか、刑務所出所者はちょっと怖いよねという、その刑務所出所者というカテゴライズでしか見られないと思うのですけれども、実際に関わっていく中で、刑務所出所者の人ではなくてAさん、Bさんという感じで、その人自身が見えてくるのかなと思って、すごく重要な知見を得られたのかなと思いました。ありがとうございました。

御代田：

ありがとうございます。

ぜひ誰か気になる人がいたら、聞き書きをしてみることをお勧めします。書き起こすのは大変ですけれども。

池田：

彼は卒業論文でやろうとしていますよね。少年のインタビューを。

フロア（C）：

トー横の人たちの。

御代田：

そうですか。

フロア（C）：

はい、背景に迫ろうと思っています。

御代田：

そうなんですね。とてもいいと思います。じゃあ、東京に行って、歌舞伎町に行って、フィールドワークしているのですね。

フロア（C）：

インタビューしに行きます。

御代田：

おお、素晴らしい。

池田：

ほか、いかがでしょうか。

最後、お2人いらっしゃったので、Dさん、お願いします。一番後ろの方。

フロア（D）：

本日は大変貴重なお話をありがとうございました。私は名古屋市内で障害者施設を運営している者です。かつ、現在こちらの大学の学生さんのフィールドワーク、新人の方を毎年受け入れている実習担当でもございます。

お話を聞いて、私も障害者施設を運営している立場の者として同じようなことを体験し、非常に共感と関心を持ち、聞かせていただきました。新たな施設をつくるときの、その地域での反対というところは私どもも同じようにありました。そういうことから、私どもも「施設の見える化」というところに現在も取り組んでいるのですけれども、やはり結論、そういった障害を持った方なりいろいろな方を知らないことが差別・偏見を生んで、そういったことになって

いくということから、本当にインクルーシブ、ダイバーシティの社会をつくっていくためにどのように取り組んでいくかというのが私たちの今の課題でもあって、私も地域サロンとかいろいろ始めたりはしているのですが、それでもなかなか地域へのアプローチの仕方、広報活動というところでも行き詰まったりして、今、多様な活動が地域にあふれているということとか、つながりというのもそれなりの個々に始まっている中で、なかなかそこに関心を持って来ていただける方が限られるというところの、ちょっと今、さらにどういう形で広報をしていくかというところで苦戦しております。そこで、何か別な視点でご意見なりアドバイスをいただけたらと思います。お願いします。

御代田：

ありがとうございます。

そうですね。直接的なアイデアは分らないですけども、例えばこの広報誌。広報誌なんてただ紙を刷って地域に配っているだけなので大した取り組みではないのですが、これは僕が2年目のときに広報誌の担当をもらって提案して、デザインを全部変えさせてもらったのです。こういうのをやってみたいんですと園長に相談したら、園長はオーケーしてくれて「やったー」と。僕はしめしめと思って実際につくっていたら、1年目の後輩の子が言ってきたのです。その子は福祉の専門学校で4年勉強してきて救護施設で実習もしてきたという子で、仕事はすぐできる。「御代田さん見てると、僕だったらこんな絶対つくろうと思わないです。部下がこれつくって言ったら絶対反対しちゃいますわ」と言っていました。基本、個人情報保護する、施設の人を守る、個人情報は外に出さないということを教室で教えられてきた身としては、こんなのは絶対思い付かないし、ネガティブに反応しちゃいます、と正直に言ってくれたのですが、それは本当にそうだなと思います。僕自身はそういう福祉の勉強は一切してこなかったもので、こういう福祉の勉強をしている人が見たらギョッとするようなことも自然とアイデアとして出てきたりするし、でも自分自身が働き続けていると、やはり施設の色に染まっていく感じもあるので、常にほかの人の、外部の風とか外部の視点を入れるというのは大事なかなと思います。やはり自分たちが気付かない施設の魅力とか切り取り方とか接点のつくり方とか、そういうアイデアをフレッシュにしていくためにも、施設でジーンと考えているよりは外とつながるのが突破口になるかなという気はしました。

池田：

ありがとうございました。

最後に、前の方。

フロア(E)：

本日はお話をありがとうございました。1点お聞きしたいことがあります。

お話の中で、救護施設の中で子ども食堂であったり地域の方の畑を借りた活動があったとお聞きして、そういったことが印象に残っているのですが、

利用者の方の生きる活力であったり希望であったり、やりがいをもどのように育んでいるのか、またどのように育まれている仕組みがあるのかを教えてください。

御代田：

ありがとうございます。

そうですね。やはり一言「役割をつくる」ということに終始するかなと思います。救護施設にはいろいろヘトヘトになった人が来る場所なので、それをまずケアするというのが一番なのですけれども、そこからもう一歩、元気を出して自分で生きていくぞと、サポートを受けながら一人で生きていくぞというところにいくまでには、やはり何か自分の役割を持って活動するとか誰かに感謝されるとか、施設を越えて自分が一市民として何か貢献しているとか、そういう感覚が持てることがすごく大事で、でも、それは別に救護施設がしなければいけないことではないのです、法律で決まっていることではないので。ですから、そこは施設としてきちんと意識的に取り組んでいく必要があると思うし、学生さんならたぶんいろいろな施設をこれから、もしかしたらこういう施設だけではなくて学校とかを見るのかもしれないですけれども、決まり切ったことではないこと、決められていないことをたくさんやっているところのほうが多ぶん良いところだと思うので、決められていないことも含めて役割をつくっていく、いろいろな形でいろいろな役割をつくって、いろいろな人がどこかにフィットするような間口を開いていくということが大事かなと思っています。

フロア（E）：

ありがとうございます。

池田：

ありがとうございました。

まだまだいろいろ伺いたいお話はあるかと思いますが、いったんこちらで終わらせていただきます。御代田先生、本当に今日はありがとうございました。

改めまして、本日は寒い中、お集まりいただきましてありがとうございます。これにて閉会とさせていただきます。

ありがとうございます。